

2019年9月7日

障害学会第16回京都大会（立命館大学朱雀キャンパス）

「1リットルの涙」と新自由主義

武蔵大学大学院人文科学研究科

社会学専攻博士前期課程2年

井上友美

武蔵大学大学院の井上友美です。新自由主義下における障害の表象について、報告します。

新自由主義という概念について、ジェンダー、セクシュアリティの観点から考察した菊地夏野は、この概念の理論的有効性に関して批判もあることを認めた上で、それでもやはりこの概念のもとに把握される社会的変化の影響は大きく、「通常考えられている以上にジェンダーとセクシュアリティの領域でその影響は深い」と指摘しています（菊地 2019: iv）。本報告ではこの視座を受け継ぎ、ジェンダーやセクシュアリティと同程度もしくはそれ以上に、障害という領域も新自由主義の影響を色濃く受けているのではないかと仮定し、新自由主義下における障害の表象を読みといてみたいと思います。

新自由主義という語が指し示す内容については、論者によってばらつきがありますが、ここではひとまず、代表的なものとして、デヴィッド・ハーヴェイの議論を簡単に確認しておくことにします。ハーヴェイによれば、新自由主義とは、「強力な私的所有権、自由市場、自由貿易を特徴とする制度的枠組みの範囲内で個々人の企業活動の自由とその能力とが無制約に発揮されることによって人類の富と福利が最も増大する、と主張する政治経済的実践の理論」を指します（Harvey 2005=2007: 10）。サッチャリズムやレーガノミクスに典型的にみられるとされるこの新自由主義に関して、ハーヴェイの指摘でさらに重要なのは、「われわれの多くが世界を解釈し生活し理解する常識に一体化してしまうほど、思考様式に深く浸透している」言説様式として、新自由主義をとらえる点です。この指摘をふまえれば、新自由主義を手がかりとして、障害がどのように解釈され理解されているか考察することは、現状をより精確に批判するために重要といえるのではないのでしょうか。

このような問題関心から、本報告では、「難病と闘い続ける少女亜也の日記」というサブタイトルで1986年に出版された手記を原作とするドラマ、「1リットルの涙」を分析します。新自由主義を日本で初めて本格的に遂行したといわれる小泉政権下の2005年に放映され、高視聴率と高評価を得たこのドラマは、新自由主義が本格化する以前に書かれた手記をどのように物語化し、何を削り落とし何を付け加えたのでしょうか。

ドラマと手記の明らかな相違として、三点指摘することができます。第一に、ドラマにおいても手記においても、亜也の母親が保健師であることに変わりはないのですが、実際には一度も仕事を辞めていないにもかかわらず、ドラマの中では、「今までは町のみんなの保健師だったけど、これからは家族専属になる」と言って母親が退職します。ドラマでは、亜也の病気を受け入れられない両親は喧嘩をくりかえし、きょうだいたちは人知れず葛藤するといった、家族の危機が描かれますが、「誰だって病気になったら、家族のみんなが助ける

のは当たり前じゃない」という母親のせりふや、「わたし、この家族が大好き」といった亜也のせりふに象徴されるように、家族の危機を通じて家族は再強化されているのです。

この「危機」というレトリックは、新自由主義の大きな鍵といえます。そもそも新自由主義は、オイルショックによる世界的な不況と低成長、そしてグローバルな競争の激化といった、経済的な「危機」への対応として導入された政策の中に出現しました。それはたとえば、少子高齢化による労働人口の減少と社会保障費の増大に直面する日本が「女性活躍」を掲げ、労働力と税収の増大を図ると同時に、社会保障費の抑制のために、長年女性の無償労働に依存してきたケア労働は変わらず女性が無償で担うことが期待される、といった形で現れます（三浦 2015）。つまり、早川タダノリが指摘するように、「『家族（親子）の絆』という美しい看板を掲げながら、各家族の『自助努力』を基本とする『日本型福祉社会』論は、福祉予算を可能なかぎり削減するためのネオリベ的福祉政策のイデオロギーにほかならない」のです（早川 2018:42-43）。こうした伝統的な家族観・性愛観の称揚は、新保守主義とも呼ばれ、新自由主義的な経済政策によって分裂させられた社会の再統合にも利用されると同時に、「新自由主義と新保守主義は女性の抑圧における共通性において依存しあっている」ことが指摘されています（渡辺 2013；菊地 2019）。

さらに、新自由主義によって対応される危機は、経済的な危機や社会の分裂という危機だけではありません。ロバート・マクルーアによれば、1960年代から70年代のアメリカで勢いを強めた解放運動において、異性愛が自らを定義づけ自然な秩序として維持するために同性愛という逸脱を必要とすることが暴かれはじめると、異性愛規範は危機を迎えます（McRuer 2006）。

この危機への対応として読みとくことができるのが、ドラマと手記の相違の二点目です。手記には登場せず、実在もしない高校の先輩・河本^{かわもと}と、クラスメイトの「麻生^{あそう}君」というキャラクターが、ドラマには登場します。ドラマの前半部分では両想いのように描かれていた河本と亜也ですが、亜也の病気の発覚によりしだいに離れていき、今度は麻生と亜也が互いに好意を寄せあうようになります。唐突に挿入されるこの異性愛関係は、「高校生だもん、好きな人と一緒に誕生日を過ごしたいって思うでしょ？それって、誰もが普通に思うことだよ」という母親のせりふによって自然化され、物語が終盤にさしかかる頃には、麻生が亜也に思いを伝えます。しかし、その後、転校先の養護学校の教員の結婚式に麻生とともに出席した亜也は、「もう会えません」と書かれた手紙を麻生に渡し、涙を流しながら両親と主治医に、「わたし、結婚できる？」と尋ねます。この、「わたし、結婚できる？」という言葉は、主治医の寄稿の中ではありますが、手記にも登場しています。しかし、主治医の回顧では「突然」発せられたというこの言葉が、ドラマでは、自分には「結婚」ができないのだと悟り麻生に別れを告げたことを示すような文脈に置きなおされています。こうして、異性愛規範やロマンティックラヴ・イデオロギーが強化されると同時に、そうした規範に沿えないことが重大な悲劇として描かれているのです。

ただし、ここで注意すべきなのは、異性愛規範の危機に対して新自由主義は、単純に異性愛を称揚することだけで対処するわけではないという点です。むしろ、異性愛規範は、自らの普遍性を脅かす脅威として同性愛を拒絶するのではなく、同性愛に対する寛容を示すこ

とによって、その十全性を遂行し強化しているのだと、マクルーアは指摘します。そして、異性愛的な身体は、異性愛を取り巻く危機をうまく切り抜けるというある種の能力によって特徴づけられるため、しばしば明確に健全な身体と結びつけられ、障害のある身体には、そうした危機の解消を繰り広げる舞台が割り当てられることとなります。つまり、新自由主義は、同性愛や障害に寛容であり、異性愛的かつ健全身体的であるような主体を必要としているのです (McRuer 2006)。

このことを示すのが、ドラマと手記の相違の三点目です。養護学校への転校を本人ではなく母親に示唆した高校の担任に対して、「何とも胸クソが悪い」、「腹が立つなァ」というように手記においてははっきりと表明されていた亜也の怒りは、ドラマにおいて、亜也のものではなく、麻生の優しさや正義感を示すものとして収奪されます。マクルーアが指摘するように、「多くの文化表象において、障害のある、クィアな人物はいまだ視覚的に、かつ物語上、劣位に置かれ、時にはあからさまに消し去られるが、もはや絶対的な逸脱を体現してはいない」のです。つまり、麻生が異性愛的で健全身体的な主体として十全性を確保するために、亜也の障害とそれに対する麻生の寛容が不可欠となっています。さらに、手記のあとがきにあった、経済的な問題や病院の無理解に対する母親の怒りも、ドラマでは消し去られ、とても腰の低い母親として描かれています。こうして、手記には確かに存在したはずの政治化の契機は、ドラマにおいて失われてしまいます。リサ・ドゥガンが指摘するように、新自由主義における平等の政治は、多様性と寛容を支持するものの、その寛容は「支配的で異性愛規範的な前提や制度に異議を唱えることなく、それらを擁護し持続させる」限りにおいてであることが読みとれます (Duggan 2003: 50)。

ここまで述べてきたように、ドラマ「1 リットルの涙」において障害は、伝統的な家族観・性愛観を強化し、そのことによって私化され、脱政治化されながらも、異性愛規範と健全主義という支配的な制度を補強する役割を果たしているということが出来ます。さらに本報告では、マクルーアがアメリカ社会に見出した、異性愛と健全身体性の相互依存的な結びつきを、日本の現状にもみてとれる可能性が示唆されました。アメリカと日本、そしてクィアと障害の置かれた文脈の違いに留意しつつ、新自由主義の規範としての異性愛と健全身体性について考察することを今後の課題として提示し、報告を終わります。

【文献】

- Duggan, Lisa, 2003, *The Twilight of Equality?: Neoliberalism, Cultural Politics, and the Attack on Democracy*, Boston: Beacon Press.
- Harvey, David, 2005, *A Brief History of Neoliberalism*, Oxford: Oxford University Press. (渡辺治 監訳, 2007, 『新自由主義——その歴史的展開と現在』作品社.)
- 早川タダノリ, 2018, 『『日本の家族』のまぼろし』早川タダノリ編著『まぼろしの「日本の家族」』青弓社, 17-47.
- 菊地夏野, 2019, 『日本のポストフェミニズム——「女子力」とネオリベラリズム』大月書店.
- 木藤亜矢, 1986, 『1 リットルの涙——難病と闘い続ける少女亜矢の日記』エフエー出版. (再版: 2005, 『1 リットルの涙——難病と闘い続ける少女亜矢の日記』幻冬舎.)

- McRuer, Robert, 2006, *Crip Theory: Cultural Signs of Queerness and Disability*, New York: NYU Press.
- 三浦まり, 2015, 「新自由主義的母性——『女性の活躍』政策の矛盾」『ジェンダー研究』18: 53-68.
- 渡辺治, 2007, 「日本の新自由主義——ハーヴェイ『新自由主義』によせて」デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義——その歴史的展開と現在』作品社.
- , 2013, 『安倍政権と日本政治の新段階——新自由主義・軍事大国化・改憲にどう対抗するか』旬報社.